

21) Trilling, *op. cit.*, p.108.

22) E. Hemingway, *Green Hills of Africa*, London, J. and J. Gray, 1956, p. 29.

以上で、筆者は、*Huckleberry Finn*において如何なる様相のもとに「河」の存在が、作者を「全愛」の立場に立たせているかを明確にした心算である。「河」の存在は、原始宗教対キリスト教という対比関係のもとに、現代における人間存在のあり方を問うことを可能ならしめているのではなかろうか。相対的価値基準の支配する現実世界の混迷、頹廢の姿と、その中で人生の放浪を続ける Huck の姿を見守るかの如く、導くかの如く悠然と流れ続けるミシシッピー河を介して、読者はこの現実世界を包む大いなる愛を感じないではおかないだろうし、また作品の世界を大いなる愛で包んでいる作者の愛の眼差しを感じないではおかないだろう。

注

- 1) Mark Twain, *Life on the Mississippi*, O. U. P., 1962, p. 199.
The Italic parts in the following pages are mine.
- 2) Bernerd DeVoto, *The Portable Mark Twain*, N. Y., Viking Press, p. 34.
- 3) T. S. Eliot, "Introduction to *Adventures of Huckleberry Finn* (London, Cresset Press, 1950)," *Twentieth Century Interpretations of The Adventures of Huckleberry Finn* ed. by Claude M. Simpson, N. Y., Prentice-Hall, p. 108.
- 4) Richard Chase, *The American Novel and its Tradition*, N. Y., Doubleday Anchor Books, 1957, pp. 143-4.
- 5) Lionel Trilling, *Liberal Imagination*, N. Y., Mercury Books, 1963, p. 107,
- 6) E. M. Forster, *Aspects of the Novel*, N. Y., Penguin Books, 1964, p. 116.
- 7) Shuichi Motoda, *Quest for Eden*, Tokyo, Kaitakusha, 1963, p. 2.
- 8) Mark Twain, *Huckleberry Finn*, Tokyo, Kenkyusha, 1969, p. 58.
- 9) *Ibid.*, p. 140.
- 10) Daniel Hoffman, *Form and Fable in American Fiction*, O. U. P., 1965, p. 335.
- 11) Twain, *op. cit.*, p. 4.
- 12) *Ibid.*, p. 90.
- 13) *Ibid.*, p. 101.
- 14) *Ibid.*, p. 137.
- 15) *Ibid.*, pp. 138-9.
- 16) Jacques Cabau, *The Lost Prairie*, Tokyo, Taiyosha, 1968, pp. 211-2.
- 17) Twain, *op. cit.*, pp. 250-2.
- 18) *Ibid.*, p. 155.
- 19) *Ibid.*, p. 272.
- 20) Mark Twain, "What is Man?," *The Complete Essays of Mark Twain* ed. by Charles Neider, N. Y., Doubleday & Company, 1963, p. 347.

依存によって生み出される世界は、一時的なものではあるが、「大いなる愛」の可能性をみた世界なのだ。精神的支柱、基盤を失い途方に暮れている現代人は、*Huckleberry Finn* の中に、「大いなる愛」の世界に近づく道のあることを、そしてそれは、人為性のない、純粹な、利害心なき宗教的態度によらねばならないということを発見し、感動するのではないかと思われる。ここに Jim への Huck の依存の現代的意味、それはまた、人間の生き方の探究という点では普遍的意味があるのではなかろうか。この点について、以下少し詳しく述べてみよう。

「文明人」Huck が、彼と同じく「文明人」たる白人たちからの逃亡の途上で、「原始人」Jim に出会い、原始信仰という形態をとっている Jim の人生観、価値観に魅き付けられることは、歴史的に言えば、原始時代の価値観がこの小説における「現代」、「文明」を謳歌する「現代」のそれにとって代ったということである。しかし、歴史の流れはその逆行を許さない。なぜならば、先にも触れたように、ヨーロッパにおけるキリスト教の優位は、信を可能ならしめる根拠、即ちイエス・キリスト出現の事実によって実質化され、現代に至っているのに対して、原始宗教はキリスト教に見られるが如き信を可能ならしめる根拠に欠けるからである。しからば、この逆行は何を意味するのか。先述したような、白人社会における諸矛盾を持つ「現代」の文明社会の中で、確固とした人生観、価値観なき「文明人」が、「現代」の人生観、価値観上の諸矛盾は如何にして生まれてきたか、そしてそれは何故にであるかを、歴史の源にまで遡り、換言すれば「原始人」の人生観、価値観の歴史的変遷の跡を辿り、こうして再び「現代」の生き方、価値観は何であるか、「現代」において如何に生くべきかを再検討せんとする人生探求の放浪の姿、これを Huck の逆行は表わしているのではないか。“All Modern American literature comes from one book by Mark Twain called *Huckleberry Finn*.”²²⁾ という Hemingway のかの有名な讃辞は、主にその文体に対して与えられたものであろうが、文明社会の中で、精神的基盤を失った現代人が生き方を探求していく精神的放浪という意味においても、的を射ていると思われる。なぜならば、Twain 以後のアメリカ文学のヒーローたちはより一層複雑かつ悲惨なる放浪を続けているように思われるからだ。

る原始信仰の態度から生まれる Jim の純粹無垢なる魂によってもたらされるものである。彼の無垢なる魂が示す Huck への親切と愛情が、Huck に内なる平和をもたらし、それが外なる平和への行動の契機となり、従来の自己形成の基盤となっていた白人社会の「良心」を捨てさせる。即ち、Jim の邪念なき原始信仰の態度から生まれる純粹な魂が、Huck に「良心」を廃棄せしめ、「良心」に不信を抱かせるに至ったのである。このことは、Huck にとって、相対的善惡を超える絶対的存在の世界が、Jim の宗教的態度によって筏の上に生じたことを意味する。相対的善惡のみの世界である St. Petersburg その他の白人社会に対して、それをを超えるものの存在する世界である筏の上の Huck と Jim の世界、Lionel Trilling に言わせれば “a community of saints”²¹⁾ が、Jim の宗教的態度から、従って Huck の Jim への依存によって一時的にせよ実現したのである。

上記の二つの世界、相対的善惡のみの世界と、それをを超える絶対的存在の世界との差異は、Jim の原始宗教への宗教的態度と白人たちのキリスト教へのそれとの差異から生ずるものである。Jim の宗教心に見られる人為性のなさ、邪念、利害心のなさは、白人たちの利害に束縛された、偽善性に満ちた態度と対照的である。成程、「原始人」Jim の原始信仰は、「文明人」たちのキリスト教信仰に比して、限界を持つ。なぜならば、原始宗教の原始性は、墮落していないキリスト教が持つところの信を可能ならしめる根拠、即ちキリスト出現という事実の欠如にあるからである。然るが故に、筏の上の Huck と Jim との世界は一時的なもので、現実にはありそうにもない世界なのである。しかし、Jim の原始宗教そのものではなくて、彼の信仰の態度に、白人社会におけるキリスト教の墮落を救う道と、従ってその社会の相対的善惡のみの世界からそれをを超える絶対的存在の世界への道があるのだ。ここに、筆者は冒頭で述べた「全愛」の立場を見る。かくのごとき利害心なき宗教的態度こそが、利害に束縛された宗教的態度によって相対的善が相対的惡を裁き、人間を相対性でもって不平等たらしめる世界から、絶対的存在の大いなる愛によって善惡ともに包まれた絶対平等の世界を可能ならしめるものなのである。

このように、Huck の白人社会からの逃亡、そして筏の上での Jim への精神的依存は、Jim の宗教性において意味を有するに至るのだ。Huck の Jim への

it seemed like I couldn't ever feel any hardness against them any more in the world. It was a dreadful thing to see. *Human beings can be awful cruel to one another.*

... and I warn't feeling so brash as I was before, but *kind of ornery, and humble, and to blame*, somehow—though *I* hadn't done nothing. But that's always the way: *it don't make no difference whether you do right or wrong, a person's conscience ain't got no sense, and just goes for him anyways.* If I had a yaller dog that didn't know no more than a person's conscience does I would pison him. It takes up more room than all the rest of a person's insides, and yet ain't no good, no how.¹⁹⁾

悪人の悪を憎む気にならず、人間が人間に対する残酷さにかえて “humble” な気持ちになる Huck のこの心情こそ、悪をも善と同等に認めようとする愛のところであり、従ってこのことは善悪の相対性を物語っているのである。後年、*What is Man?* (1917年) において、「人間の良心は全く無価値だ。」²⁰⁾と *The Old Man* に断言させる Twain の絶望は、*Huckleberry Finn* において追求されているこのような愛、即ち善悪の相対性を超える愛に対する失望の結果であると思われる。また、必然的に上記の Huck の「良心」への不信の態度は、白人社会の中で植えつけられた「良心」が、もはや彼の判断の基準としての資格たるを欠くということをも明示している。相対的善悪によって人間同志が裁き合い、争い合う白人社会の中には、堕落せるキリスト教の中には、Huck は自己の精神的支柱を求めることが不可能であるということを示しているのだ。

ここで、先に挙げた第二点、即ち河下りの旅の間は Huck は原始信仰を精神的支柱としている Jim に精神的に依存できたという事実の意味について考えるべきである。キリスト教の堕落による白人社会の偽善と頹廃を凝視する Huck は、当然のことながらこの社会の中に安らぎ、満足を見出すことはできない。しかし、Jim と共にある筏の世界は、彼にとっては、心の落ち着き、平和を得ることのできる “home” である。白人社会の不安、拘束と恐怖の世界に対して、Jim との河の生活は自由と平和の世界である。そして内なる心の平和は外なる平和の実現へと Huck を導いてゆき、それが Huck をして白人社会の「良心」に背かせ、社会的に束縛されている Jim に自由を与える為彼を盗み出す決断を行なわせるのだ。この Huck の抱く心の平和は、先に述べたように、河の世界におけ

る所謂「敬虔なる人々」の「気違いのような悔い改めぶり」は、二人の詐欺師たちの好餌となるという皮肉な報酬、これらは、彼らの宗教的態度への反省の欠如に対する作者の厳しい批判である。

You couldn't make out what the preacher said any more, on account of the shouting and crying. Folks got up everywheres in the crowd, and worked their way by main strength to the mourners' bench, with the tears running down their faces; and when all the mourners had got up there to the front benches in a crowd, they sung and shouted and flung themselves down on the straw, *just crazy and wild.*¹⁸⁾

以上の如くに戯画化された、信仰の偽善、墮落の原因は、基盤たる宗教的態度への問いかけはなされず、ただ単に道徳律のみが幅を利かせ、「良心」という形で個人を束縛することにある。道徳律という相対的善が、絶対化されて「良心」という美名を与えられ、相対的悪を非難告発するのである。Huck に黒人奴隷の逃亡に協力しているのだという苛責を与えるのもこの「良心」である。即ち、問われるべき根本的態度、基盤たる絶対的存在への信仰の態度は問われず、逆に表面の相対的善が絶対を僭称し、人間が人間を裁くようになったのが、この作品に見られる墮落せるキリスト教の姿である。相対的善悪のみに依拠して人間が互いに裁き合い、遂には殺し合うまでに至る様が、果しのない殺し合いを繰広げる貴族 Grangerford 家と Shepherdson 家との間の宿恨、酔いどれ Bogs を虫けらの如く射殺する Colonel Sherburn の暴力などに如実に示されている。

作品の終結部、Phelps 農場において、「全身コールタールと羽根で覆われ」た the king, the duke の詐欺師が受ける私刑の光景を目撃した Huck の、「どうしてもこの二人を憎む気になれなく」て、「なんとなく自分が浅ましい、卑しい人間に感じられ、なんとなく気が咎めるのをおぼえた。」という感慨と、それに続く「良心」への不信の言葉は、この作品における作家の立場を暗示しているように思われる。

Well, it made me sick to see it; *I was sorry for them poor pitiful rascals,*

を下させるのである。

V

しからば、以上の如き Huck の Jim への精神的依存は如何なる意味を持つのであろうか。以下、この点について述べる。Jim は、自然や事物に精霊をみとめる原始宗教を奉じ、自然現象の意味を読みとる知恵を持つ「原始人」としての姿を我々の前に現わす。一方、Huck は、白人社会で文明化された所謂「文明人」であり、キリスト教という精神的基盤を、他の「文明人」である白人たちと共有していた。この「文明人」たる Huck は、白人の文明社会から逃れて、「原始人」Jim と文明化されていない原始の世界、異神の君臨する自然界、「河」への放浪の途につくのである。この事実は二つのことを、即ち、第一に、Huck の白人社会からの逃亡は、白人社会の精神的基盤たるキリスト教が退屈で形式的な道徳しか教えない程にまで墮落しており、従って白人社会においては彼は精神的支柱を見出せなかったということを、第二に、Jim との河下りの旅は、その間 Huck は原始信仰を自己の精神的支柱としている Jim に精神的に依存できたということを示していると思われる。

先ず第一の点、Huck の育った白人社会におけるキリスト教の墮落について考えてみよう。この墮落の諸相は、St. Petersburg の the Widow Douglas, Miss Watson らによって、旅の途中に立寄る沿岸社会の白人たちによって、更に作品の終結部における Phelps 農場の Aunt Sally らによって、滑稽化され諷刺化されて余すところなく発き出される。道徳の基準は宗教にあるべきであり、道徳的態度を追求せんとする者は、先ず己れの宗教的態度が如何なるものであるかという自己への追求を先行させねばならない。自己の宗教的態度への反省、神に帰依すべく心底から祈りを献げているか否かという反省が根本的なものであり、従って自らの宗教的態度への反省の欠如が、道徳を形骸化することとなり、また必然的にその宗教はもはや人々の精神的基盤たる資格を欠くという結果に陥っていくのだろう。Watson, Douglas らの Huck に対する道徳上の躰の滑稽化された態度、或いは、沿岸の町で催される野外集会におけ

を徹底的に発く。同時に、Jim によって純化された彼の心は、他人の心情を共に理解することも、他人の悲嘆に同情を寄せることも、不幸から他人を救うために身を賭して真実を告げることもできるのだ。

そして、遂に、長い煩悶の末、詐欺師たちに売りとばされた Jim を盗み出す決心をするに至る。

The more I studied about this the more *my conscience went to grinding me*, and the more wicked and low-down and ornery I got to feeling. And at last, when it hit me all of a sudden that *here was the plain hand of Providence slapping me in the face* and letting me know my wickedness was being watched all the time from up there in heaven ... And got to thinking over our trip *down the river*; and I see Jim before me all the time ... I'd see him ... do everything he could think of for me; and *how good he always was*

It was a close place. I took it up, and held it my hand. I was a-trembling, because I'd got to decide, forever, betwix two things, and I knowed it. I studied a minute, sort of two things, and I knowed it. I studied a minute, sort of holding my breath, and then says to myself:

"All right, then, I'll go to hell"—and tore it up.¹⁷⁾

この決断は、Huck にとってはキリスト教信仰ではなくて原始信仰を持つ Jim の影響の方が、奴隷制度を是とする白人社会のキリスト教道徳律のそれよりも強大であったことを意味する。後者の影響とは、彼が St. Petersburg の生活の中で受けた教育によるものである。即ち、そこにおいて Huck は、他の白人たちと同様にキリスト教に精神的基盤を置くように教育されていたのである。従って、旅の最後の Jim 救出の決断は、白人社会の道徳律を無視したということ、他の白人たちと従前まで共有していた精神的基盤を放棄したことを意味する。今や Huck は白人社会における異端者であり、彼らの道徳律によってはその人格を認められない黒人の原始信仰に基く宗教的態度に、生きるための価値基準を置くこととなったのである。

原始信仰という点において一体化した「河」と Jim の存在は、以上のような過程を経て Huck の精神形成に影響を与えるのである。「河」の存在を前提とするところの Jim の宗教的態度が、Huck の精神を形成し、彼に新しい決断

表面の優雅な美飾の下に潜む偽瞞，残忍なる貴族の正体を看破するのである。それ故，この虚偽の世界から Jim の待つ筏へ戻って得られる安らぎは，自己の心即ち今は既に体得している純粋な心を取り戻すという意味で，故郷へ帰った時の心情である。

We said there warn't no home like a raft, after all. Other places do seem so cramped up and smothery, but a raft don't. *You feel mighty free and easy and comfortable on a raft*¹⁴⁾

この宿恨から逃れて後，the king と the duke と称する二人の詐欺師の侵入前のほんのしばらくの間，Huck と Jim の二人だけの世界を実現する河の静寂と美は，本稿の冒頭に引用した *Life on the Mississippi* 中の河の描写と，heaven のイメージを持つという点において類似性がある。

Two or three days and night went by; I reckon I might say they swum by, they slid along so *quiet and smooth and lovely*. ... we ... watched the day-light come. Not a sound anywheres—*perfectly still—just like the world was asleep*, ... The first thing to see, looking away over the water, was a kind of dull line ... then the river softened up away off, and warn't black any more, but gray ... it was so still, and sounds come so far; and by and by you could see a streak on the water you know by the look of the streak that there's snag there in a swift current which breaks on it and makes that streak look that way; you see the mist curl up off the water, and the east reddens up, the river, and you make out a log cabin in the edge of the woods, away of the bank on t'other side of the river ... then the nice breeze springs up, and comes fanning you from over there, so cool and fresh and sweet to smell on account of the woods and the flowers ... and next you've got the full day, and everything smiling in the sun, and the song-birds just going it!¹⁵⁾

正に，J. Cabau の「ハックとジムの理想的な孤独，この二人の大きな茫漠とした楽園のような孤独」¹⁶⁾ という表現が適合する情景である。先に述べた如く，Jim の存在によって，事実の表面の裏にある真実を見透すことが可能となった Huck の眼は，詐欺師たちの沿岸社会での様々の悪事，またその人間たちの悪

られたくない。」という後悔と、「二度と蛇のぬけがらを掴むようなことはすまい。」という決心に至る。その後、島を出て第一の冒険、即ち殺人者たちの暴力をのせた難破船での体験を経て、Jim の主張、忠告を認めるという形で、Huck は Jim の存在を受容する。

Well, he was right; he was most always right; he had an uncommon level head for a nigger.¹²⁾

しかし、彼が根底から Jim の純粋な精神を理解し得るのは、両者の間にある白人の少年対黒人奴隷という階級的差別を越える時であり、それは霧の発生のためお互いに行方不明となりやっと会えたといって狂喜する Jim をからかい、初めて彼の憤りにふれた時である。Huck に会えた喜びとその真情を傷つけられた怒りを夢解きになぞらえた Jim の言葉は、彼の汚れなき心を表わしており、またその言葉に対して接吻でもって許しを乞う Huck の謙遜な態度は Jim の純粋さを体得したことを示しているといえるだろう。

"What do dey (the trash) stan' for? I's gwyne to tell you En when I wake up en fine you ag'in, all safe en soun', de tears come, en I could 'a' got down on my knees en kiss yo' foot, I's so thankful. En all you wuz thinkin' 'bout wuz how you could make a fool uv de Jim wid a lie. Dat truck dah is trash; en trash is what people is dat puts dirt on de head er dey fren's en makes 'em ashamed."

... It make me feel so mean I could almost kissed his foot to get him to take it back.

It was fifteen minutes before I could work myself up to go and humble myself to a nigger; but I done it, and I warn't every sorry for it afterward, neither.¹³⁾

従って、Jim の純粋な精神を継承した Huck には、貴族 Grangerford 家、Shepherdson 家間の宿恨も、ありきたりの説教じみたキリスト教信仰の退廃した姿として映るのみで、Jim の制止を軽んじ、難破船に冒険心を躍らすかつての Huck ではない。今や、事実の裏にある真実を見通す Huck の濁りなき眼は、

懸隔を感じ、逃げ出したり嘲ったりという態度であるのに対し、黒人奴隷や下層の白人たちの間に信じられている迷信、呪術に対しては真剣な態度で臨んでいるという点に注目しなければならない。Miss Watson の厳しい説教に気を滅入らせた Huck には、夜は精霊の住む異教的世界を呈し、彼を不可思議なる不安感で動揺せしめる。

... I heard *an owl, away off, who-whooping about somebody that was dead, and a whippowill and a dog crying about somebody that was going to die; and the wind was trying to whisper something to me, and I couldn't make out what it was, and so it made the cold shivers run over me. Then away out in the woods I heard that kind of a sound that a ghost makes when it wants to tell about something that's on its mind and can't make itself understood, and so can't rest easy in its grove, and has to go about that way every night grieving. I got so downhearted and scared I did wish I had some company. Pretty soon a spider went srawling up my shoulder, and I flipped it off and it lit in the candle; and before I could budge it was all shriveled up. I didn't need anybody to tell me that that was an awful bad sign and would fetch me some bad luck, so I was scared ... and then I tied up a little lock of my hair with a thread to keep witches away.*¹¹⁾

キリスト教道徳社会に反撥的で、かように無意識的に神秘の世界への傾斜をもつ Huck にとって、キリスト教道徳の拘束なきミシシッピー河における原始信仰を持つ Jim との邂逅は必然的結果をもたらすこととなり、河下りの旅の進行と共に彼は、Jim の原始信仰のもとでその邪心なき宗教的態度から生まれる彼の清浄なる精神を次第に継承してゆくのである。

Huck による Jim の精神の受容は先ず、彼らが際会する自然現象をもとに後者によってなされる予言や警告に対する前者の驚きと信頼から始まる。Jackson 島の生活で、Huck は先ず、Jim が「あらゆる種類の前兆を知って」いることに驚き、次に小鳥の雛の低空飛行は雨を呼ぶという知恵のおかげで雨を無事に避け得たことに感謝する。更に、Jim の警告するガラガラ蛇のぬけがらのたたりを軽んじ、いたずらを仕掛けたことから Jim が蛇に噛まれ二日二晩苦しむという結果に、「出来ることなら、これがみな僕のせいだということをジムに知

能な清浄なる魂から生まれたものに外ならない。

Jim said the moon could 'a' laid them (stars); well, that looked kind of reasonable, so I didn't say nothing against it, because I've seen a frog lay most as many, so of course it could be done. We used to watch the stars that fell, too, and see them streak down. Jim allowed they'd got spoiled and was hove out of the nest.⁹⁾

以上のような Jim の原始信仰に窺われるその宗教的態度は人為性のない、邪念、利害心を全く含まないものである。神秘の世界に何の邪念も抱かずに純粹無垢なる信仰を献げるこの Jim の宗教心は、腐敗し歪んだ沿岸社会や St. Petersburg の人々の偽善、貧欲（それは後に述べるように墮落したキリスト教の姿として捉えられる）に対比すると、砂漠の中の清泉のようなものである。

上述の Jim の宗教的態度の具体的検討から明白なように、彼の原始信仰及びその邪心なき宗教性は、ミシシッピー河の存在を前提とする。河の世界に入る以前の Jim の呪術への傾倒に、邪心なき宗教性を見ることは困難であるが、河の世界に入ってから後の彼は、Daniel Hoffman の表現を借りれば、“if the river is a god, Jim is its priest”¹⁰⁾ と言うことができよう。奴隷の桎梏から河に逃れて自由になるということは、彼にとっては単に社会的自由を意味するのみならず、異神の帰依者となり人為性なき宗教心が抱けることを意味する。「河」の存在が Jim にこのような宗教的態度を執ることを可能ならしめるのである。「河」の世界あつての Jim の信仰心なのだ。即ち、原始信仰という点において、「河」の存在と Jim のそれとは一体化していると見做すことができるのである。

IV

この一体化した「河」と Jim が Huck の精神形成に影響を与えるのであるが、ここに Jim の宗教性が重大な意義を持つに至る。これより後しばらく、Huck が Jim の存在様式、生き方を認め、或いは受容してゆく過程を辿ることにする。St. Petersburg の生活にある時 Huck は、Miss Watson の容赦のないお説教、the Widow Douglas の几帳面な躰、Tom の日曜学校臭い冒険ごっこなどには

ピー河に逃れて自然のふところにいだかれると、彼はさながら古代の聡明な魔術師のごとく、自然の徴候を読みとり、さまざまの前兆を語り、民間治療の術を発揮して、純粹無垢の魂をもった自然人に急変するのである。』⁷⁾ という指摘をされているが、確かに St. Petersburg の白人社会を離れた Jackson 島以来、河下りの旅の間、彼は自然現象の意味を読みとり、自然についての知恵を持つ「原始人」として姿を現わす。

Jim は St. Petersburg というキリスト教道德の支配する白人社会においては魔女の魔法を本気で信じたり（第二章）、髪の毛の球で呪術を行ったり（第四章）する、単なる迷信深い黒人奴隷として Huck や Tom たちの滑稽の対象となる。しかし、第八章から第三十一章までのこの作品の展開部をなす河下りの旅の間の Jim は「あらゆる種類の前兆を知っており」（第八章）、「Jim の言うことは大抵いつも本当」（第十四章）で、自然についての知恵を持つ、原始宗教の威厳ある信仰者である。即ち、キリスト教道德社会においては彼は身の拘束がまた心の拘束でもあったが、ミシシッピー河の自然の中では、彼の方が自ら自然に融け込み従うこととなる。ミシシッピー河に浮ぶ Jackson 島の山の尾根に集まる動物達の和やかさは、Jim が自然の神秘の中に融合していることを示す。

Well, on every old broke-down tree you could see rabbits and snakes and such things; and when the island had been overflowed a day or two got to tame, on account of being hungry, that you could paddle right up and put your hand on them if you wanted to The ridge our cavern was in was full of them. We could 'a' had pets enough if we'd wanted them.⁸⁾

また、Huck のいたずらから Jim が蛇に噛みつかれ苦しむという災難、自由州へ向う地点 Cairo を通過してしまったという不運を、ガラガラ蛇のぬけがらのたたきだと Huck に教える Jim の態度は、自然の中の不可思議なる力を謙虚に信ずる者のそれなのだ。この二度目のたたきの後巻込まれた Grangerford 家と Shepherdson 家との間の宿恨から再び河に逃れた Huck と共に星空を見上げて語る Jim の話のもつ神秘的抒情性は、超自然的存在への帰依者にして初めて可

なり、善悪ともにこの絶対的存在の大いなる愛のもとに認められ、全ての人間が平等である状態が可能となる。

Forster の先に示した「我々をより偉大なる存在へと導く」という言葉を、筆者は、以上のような人間全てを包む大いなる愛を感じるという意に解する。そしてこの大いなる愛によって作品を、作品の世界を、支配せしめている作家の立場を「全愛」の立場と称する。なぜならば、善悪を認め、人類全体を包むこの愛によってこそ、人間の全的把握が可能となるからである。小説技巧上、対象描写の角度から内的視点と外的視点とが分けられているが、「全愛」の立場というのはこれらの視点を通じて総合、統一された作家の位置であって、表現方法というよりも作家の人間把握の態度をさすのである。

人間の全的把握を可能ならしめる「全愛」の立場に対して、人間を一面的に把える態度を「偏愛」或いは「無愛」の立場と称することができるであろう。相対的善の上に立って、悪を認めまいとするところには人類全部を包む大いなる愛は生まれて来る余地がない。この世において認められる相対的善のみを絶対化し、それに背く悪を全面否定するところには、偏狭な愛のみが生れるか（より厳密に言えば、偏狭な愛などは存在しないと見做してよいかもしれない）或いは愛は生まれないかであり、このような「偏愛」、「無愛」の立場に立つ時、人間は一面的にしか把握され得ない。

III

以上、「全愛」の立場についてみてみたが、では、それは *Huckleberry Finn* においては如何なる形で表明されているであろうか。以下、最初に黒人奴隷 Jim の原始宗教に対する宗教的態度、次にそれと Huck の精神形成の過程との関連性、最後に Huck の Jim への精神的依存の普遍的意味という手順で検討する。

先ず明確にしておくべきは、逃亡奴隷 Jim の宗教的態度である。Jim はこの作品中、極めて重要な位置を占めているが、それは彼がキリスト教ではなくて原始宗教を信じており、この宗教的態度が Huck の精神形成に大きな影響を与えるからである。Jim の原始信仰に関して、元田脩一氏は「ひとたびミシシッ

ての「全愛」の立場に作者 Twain が立っていることを、物語っているように思われる。従って、「河」の存在が作品を傑作たらしめている所以を、*Huckleberry Finn* において「河」により「全愛」の立場が、どのようにして貫かれているかを明らかにすることによって検討するところに、本稿の狙いを置いている。

II

さて、「全愛」の立場とは何であろうか。E. M. Forster は *Aspects of the Novel* の終り近くで、小説には小説全体が奏でる一つのリズムがあることを *War and Peace* を例にとって述べている。

Is not there something of it in *War and Peace*? ... Such an untidy book. Yet, as we read it, do not *great chords*, begin to sound behind us, and when we have finished does not every item—even the catalogue of strategies—lead a *larger existence* than was possible at the time?⁶⁾

この「より偉大なる存在」とは、読後感じられる余韻、更に敷衍して言えば、作品の世界全体を支配する絶対的存在の大いなる愛の意ではないだろうか。

War and Peace には悪に対する憤りは示されていてもそれに対する憎しみはそうではなく、悪は善によって告発されるのではなく善も悪も共に相対的であることが語られているが、この小説を読み終えた読者が芸術的感動を覚えるのは、相対的な人間の善悪を超えた大いなる愛が小説に描かれた世界を支えているからであろう。相対性を超えてあるこの大いなる愛によって悪も、善と同じように包まれるのであり、かくあってはじめて、個々の人間は全てその存在を認められて生きることができるのである。現実世界に生きてゆく際に、我々は通常、相対性の上に行動の基準を置き、相対性を超える存在に気付かないか、或いは、それを忘れている。従って現実にあっては、善が絶対を僭称し悪を否定し去るという状態、故に人間が人間を裁き合い全ての人間の存在が平等に認められないという状態が起る。それ故、相対的善悪を超える絶対的なものの存在を感知認識すれば、善悪ともに相対性においては平等であるということに

Huckleberry Finn 試論

—「河」を追いて—

飯田正美

I

1876年に書き始めた *Huckleberry Finn* に苦心の最中、1882年、ミシシッピー河を訪れた Mark Twain は、そこに “symbol of eternity”, “realization of the heaven” を感得した時の感動を次のように表現している。

The loneliness of this solemn, stupendous flood is impressive.... League after league, and still league after league, it pours its chocolate tide along ... with seldom a sail or a moving object of any kind to disturb the surface and break the monotony of the blank, watery solitude; and so the day goes, the night comes, and again the day—and still the same, night after night and day after day—majestic, unchanging sameness of serenity, repose, tranquillity, lethargy, vacancy—*symbol of eternity, realization of the heaven* pictured by priest and prophet, and longed for by the good and thoughtless!¹⁾

雄流ミシシッピーの静寂の中に永遠を見るという Twain のこの神秘性が、翌1883年、*Huckleberry Finn* を完成させ、「河」をこの作品の実質的支配者たらしめているのであって、作品の枢軸としてのこの「河」こそが、*Huckleberry Finn* を傑作たらしめているのだと思われるのである。従来、Bernerd DeVoto²⁾をはじめ、T. S. Eliot³⁾, Richard Chase⁴⁾, Lionel Trilling⁵⁾ など多くの批評家が、*Huckleberry Finn* の偉大さは「河」にあることを指摘してきた。

一体、ミシシッピー河の存在が何故に作品を傑作たらしめるのであろうか。「河」の存在は、筆者なりに把握した作品の世界に関する作家の視座の一つとし